東京外国語大学総合文化研究所　総合文化研究　第 24 号（2020）
Tokyo University of Foreign Studies, *Trans-Cultural Studies,* Vol. 24 (2020)

神秘のミステリー小説『ヴァロンゴ桟橋の犯罪』真犯人はだれだ？

武田千香

今年、世界中に広まり、大きな論議を呼んだ Black Lives Matter 運動は、ブラジルでも他人事ではない。黒人が殺人事件の犠牲者になる割合は非黒人に比べ圧倒的に高く、2018 年の黒人の殺人被害者は全体の 75.7% にのぼるという。しかもそれは悪化傾向にあり、2008 年から 2018 年までの 10 年間に、非黒人の被害者数が 12.9% 減少しているのとは対照的に、黒人のほうは 11.5% 増加している。また人種に加えてジェンダーにおいても弱者である黒人女性の状況はさらに深刻で、同じ 10 年間に非黒人女性の 11.7% 減に対し、12.4% 増となっている[1]。

人種格差は文学にも表われている。ブラジルの文学は、歴史的な観点で言えば、基本的に白人男性によって書かれ、黒人は長い間、表象される側に立ってきた。この実態は、数的に白人が過半数を割っている現代においても（白人 44.2%, 黒人・混血人 54.9%, IBGE 統計 2016 年）さほど変わっていない。ダルカスターニュの研究（2008）によれば、過去 15 年間に主要な 3 出版社（Companhia das Letras 社 , Record 社、Rocco 社）から刊行された小説 258 作を調べたところ、白人作家が占める割合は 93.9％だという。ちなみに男性作家も 72.7% を占めており、ブラジルの文学は、人種・ジェンダーにおいてきわめてアンバランスな状態にあることがわかる。登場人物における格差はさらに顕著で、主人公の約 84.5% が白人であるのに対し、黒人はわずか 5.8%、また視点が確保される語り手になると偏りはさらに著しく、白人が 86.9%、黒人は 2.7% で、黒人女性に至ってはなんと 0.6% だという[2]。

そんな中でも黒人女性作家が徐々に主体的な声で語り始めている。ここで紹介するエリアーナ・アウヴィス・クルス（Eliana Alvez Cruz）もその 1 人で、2015 年に自らのルーツをもとに書いた歴史小説『灰汁（*Água de Barrela*）』でデビューし、『ヴァロンゴ桟橋の犯罪（*O crime do Cais do Valongo*）』は 2018 年に発表した 2 作目である。

エリアーナ・アウヴィス・クルス『ヴァロンゴ桟橋の犯罪』

『ヴァロンゴ桟橋の犯罪』の舞台は、今から遡ること 200 年の 19 世紀初めのリオデジャネイロ、ポルトガル王室がナポレオン戦争を逃れてリスボンからリオデジャネイロに移って間もないころだ。ヴァロンゴ地区のある路地で男性の殺害死体がみつかった。被害者は、飛ぶ鳥を落とす勢いの実業家ベルナルド。奴隷売買のほか、港近くで奴隷商人を相手に宿

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

泊施設を営むなど、奴隷にまつわる商売で大きな利益をあげ、待望の男爵号を手に入れ、リオの没落貴族の令嬢との縁談もまとまり、まさに絶頂のさ中の悲劇だった。死体は奇妙なことに、特注したかのようにぴったりの大きさのキルトで包まれ、腹には包丁が刺さり、身体は2か所の部位が切り取られていた。ただちに監察官ヴィアナによる捜査が開始された。この小説は歴史ミステリー仕立てで、パウロ・フェルナンジス・ヴィアナ監察官は実在の人物だ。捜査には助手として混血のヌーノがついた。

監察官ヴィアナが嫌疑をかけたのは、被害者の奴隷のムアーナ、ホーザ、マリアーノの3人。普段からベルナルドから酷使されていただけに彼らには十分な動機があった。案の定、取り調べでは3人の全員が、次のように事件への関与を認める証言した。マリアーノは、自分はベルナルドの死装束を作るために毎日少しずつキルトの制作を進め、「私は奴を頭の中で殺しました」(147)[3]と言った。毎晩、慰みの相手となることを強いられていた料理係のホーザは、「短刀を突き刺したのは私です。相手が死んでいようが、そんなことは構いません。私は、奴が私の中に入るために使った汚れた武器をぶち切り、私が作った料理を食べた腹に短刀を突き刺しました」(147)。そして最後はムアーナがこう締めくくった。「私も主人を殺しました。私は、奴や奴の仲間らがほかの人々に与えたのとおなじ運命を宣告してやったのです」(147-148)、そう言ってベルナルドの小指を見せた。詳しい経緯は割愛するが、これは、まだアフリカで平和に暮らしていたころ、奴隷貿易のせいでムアーナの人生が大きく変わる契機となった事件を象徴するものだった。

つまり死体にあった奇妙な痕跡は彼らの仕業であったのだ。だが、ホーザの証言にもあるように、3人が危害を加えたとき、ベルナルドはすでにことときれていた。そして3人にはアリバイもあった。となると、犯人はだれなのか。この点については、ネタバレになってしまうので、触れないでおくが、とにかく3人はそれぞれのやり方で、ベルナルドに復讐を果たした。なにしろベルナルドは、ほんの些細なことで冷酷な体罰を加え、毎晩女性を手籠めにする残忍な人物だ。そして、先述したように彼が築いた富の大半が奴隷貿易から生み出されたものだ。マリアーノは言った。「あの豚野郎が路地に倒れているのをみつけ、私はすぐにわざわざ奴のために縫ったキルトを取りに帰ったんです。布を縫うひと針ひと針に私は願いを込めました、いつかもう二度とあいつの顔を見ないように奴をこれで覆ってやりたいと」。(147)

物語は、ヌーノとムアーナの2人が、事件について自分の知るところをそれぞれ交互に語る形で進められる。すなわち読者は、事件の真相を2人の口を通して知るところになるのだが、ここで一つ疑問が湧く。ヌーノの場合はヴィアナの助手をしていたため、捜査の経緯を知っていても自然だが、ムアーナはなぜ、事件のあらましを知ることができたのか。彼女にはアリバイがあったではないか。実はここにこの小説の核心がある。もし読者がこの小説に、犯罪の論理的な謎解きを愉しむ知的ゲームを期待するなら、興ざめするかもしれない。ムアーナが事件の真相を知ったのは、彼女の霊が殺人現場に行き、事件の一部始終を目撃したからだった。彼女は霊能力者だったのだ。目撃だけではない。小指を切り取るという復讐を果たしたのも霊だった。ホーザとマリアーノも同様で、肉体はアリバイを打ち立てるために然るべきところに残り、霊だけが現場へ赴き、復讐を果たしたのだった。

3　本小説（Cruz 2017）からの引用はカッコ内にページ数を示す。

アフリカ的神秘の世界

この本には、事件の顛末と並んで、ムアーナが語る自分史にかなりの紙幅が割かれている。ムアーナは、奴隷制廃止論者のイギリス人教師ミスター・トゥールが実施するブラジルの奴隷制度に関する実態調査に協力する形で、自分がモザンビークからブラジルに連れてこられ、奴隷になるまでのいきさつを語るのだが、話の最後のほうで、やはりこの人物もすでにこの世を去っていることが明かされる。死者と交流できたのは、ムアーナの霊能力のおかげだった。

ムアーナは、アフリカのモザンビークのナムリ山の近くのマクア・ロムエ村で生まれ、地母神ニペレの懐で育った。父親が奴隷貿易への関与を拒否したことで恨みを買い、故郷にいられなくなりケリマネに逃れたものの、一家全員が奴隷商人の手に渡り、奴隷船に乗せられブラジルへ連れてこられてしまったのだ。その過程で、まずはケリマネで身を隠すためにイスラム教に改宗することを余儀なくされ、ブラジルに渡ってからは強制的にカトリックに改宗させられた。だが、故郷のマクアの地母神ニペレへの信仰を失わず、ムアーナは常に先祖たちの霊に支えられて生きていた。精霊信仰や祖霊信仰はアフリカの文化の顕著な特徴で[4]、霊は日常でともに暮らす存在だ。したがってこの小説に登場する霊は単なるファンタジーではない。いったんはもぎ取られ、絶えてしまった自分たちのルーツを取り戻し、再びアフリカの精霊とつながり、アフリカの神々への信仰と文化を、そしてアフリカ系子孫としての自分自身を取り戻すための文学的企てなのだ。その視点から読み直すと、この小説にはまったく逆の側面も見えてくる。カギは、題名にもある「ヴァロンゴ」という地名にある。

負と正の世界遺産ヴァロンゴ

ヴァロンゴとは、かつて奴隷市場があったリオデジャネイロの地区である。ブラジルが「発見」された 1500 年から 1867 年のあいだにアフリカからアメリカ大陸へ奴隷として連れていかれた人数は 12,521,337 人にのぼる。そのうちブラジルに渡ったのは約 500 万人、実に全体の約 40％である[5]。そのうちの 230 万人、すなわち 2 人に 1 人がリオデジャネイロに上陸した。一部はリオデジャネイロに留まり、そのほかはサンパウロ、ミナスジェライスを中心にブラジル南東部に送られた。1770 年代まで奴隷船はリオの中心街のプライア・ド・ペイシ（現プラッサ・キンジ）に到着していたが、町の中心に奴隷市場があるのは不都合なことから、1779 年にヴァロンゴ地区に移転された。ヴァロンゴ桟橋は、奴隷の「積み下ろし」が行われた場所である。その後 1831 年にイギリスの圧力によって奴隷貿易がいったん禁止され、表向きの奴隷の輸入はできなくなると、ヴァロンゴ桟橋は閉鎖された

4　落合 2009, p. 5.

5　Gomes 2019, p. 24.

が、それまでの約 50 年のあいだに迎え入れたアフリカの人々はおよそ 100 万人にのぼるという。ムアーナは、「アクヤ（白人）の頭にはパタカ（銀貨）、ヘイス（通貨単位）、ドブラォン（金貨）しかなかった。ヴァロンゴは、我々を使える手はすべて使って稼いだ」、「死にかけた奴隷も商売になった。二束三文で買い、(快復させて）売り直すことで儲けたのだ」(164−165, 括弧内筆者)。ヴァロンゴはすべてが奴隷貿易で成り立つ地区だった。

1843 年、ペドロ二世の皇妃クリスチーナを両シチリア王国から迎えるため、新しい桟橋が、ヴァロンゴ桟橋を埋める形でその上に建設された。そして 20 世紀初頭のリオの都市大改造の際には、その新桟橋も埋められてしまう。こうしてヴァロンゴ桟橋の記憶は文字通り埋没してしまうが、100 年以上の年月を経た 2011 年、思いがけない形で陽の目を見る。きっかけは、2014 年のワールドカップと 2016 年のリオのオリンピック・パラリンピックだった。開催に向け、港湾地区再開発プロジェクト「リオ・マラヴィーリャ」が開始される前に、ヴァロンゴ地区の発掘が行われたのだ。そこからは大量のお守りやアフロ・ブラジル宗教儀式用品、指輪や腕輪などのアクセサリーなど多くの遺品が掘り出され、痛ましい過去がよみがえった。2017 年、ヴァロンゴ桟橋は過去の過ちを伝える負の遺産として、世界遺産「ヴァロンゴ埠頭の考古遺跡」に指定された。

この近くには、奴隷船による苛酷を極める長旅の末、ブラジルに到着しながら命果てた人々が眠る新黒人墓地の遺跡もある。「新黒人」とはブラジルに到着間もない黒人のことだ。そこには 2 万人から 3 万人が眠るとも言われる。小説の中でこの界隈は、「生者の世界」である都心に対し、「死者または半死者の世界」と表現されている（16)。ここを舞台に発生した殺人事件の真相は、実は監査官には明かされず、ヌーノは、ムアーナが残した手記を通して後で知るという設定になっている。つまりこの事件は公には未解決のまま小説は終わるのだ。このことはきっと、この殺人事件自体の犯人がだれかは大して重要ではないことを示している。重要なのはその事件が、ヴァロンゴで起こったこと、被害者が奴隷貿易により莫大な富を築いた商人であること、被害者には、奴隷制度の犠牲者である黒人から復讐が加えられていたこと、そして、特に重要なのが未解決のまま終わっていること、だ。ブラジルの黒人文学を代表する作家コンセイサォン・エヴァリストは、「奴隷制廃止から 130 年経った今も奴隷制は未解決のままだ」と述べている[6]。『ヴァロンゴ桟橋の犯罪』を単なる推理小説として読むと、そのもっとも重要な意味を見失う。物語上の犯人はどうでもよい。「ヴァロンゴ桟橋の犯罪」によって暴かれるのは、奴隷制度の非人道性であり、真犯人は、その制度の甘い汁を吸い、その利に群がった人々、「アクヤ（白人)」なのである。

ブラジルの奴隷制廃止には根本的な問題があった。解放奴隷への支援はまったくなく、社会に統合する方策はとられなかったため、元奴隷たちは、何の賠償も保障も援助もないまま社会に放り出され、その結果、社会的周縁に追いやられ、貧困と差別にいっそう苦しむことになった。現代のブラジル社会の格差の原因はここにある。

だがヴァロンゴは、決して負で終わったわけではない。その後、この地区にはアフリカ系の人々の集住地「ペケーノ・アフリカ」が形成され、アフリカの文化が再生する。リオデジャネイロで最初のアフロ・ブラジル宗教のカンドンブレの拠点が置かれたのもここだったし、今やブラジルを代表する文化となったサンバが生まれたのもここである。ヴァ

6　BBC News Brasil(2018)

ロンゴにはまさに負を力に変えるアフリカのパワーがみなぎっている。そしてクルスも、ここを舞台にアフリカの神秘の世界をブラジルの文学に吹き込んでいるのである。

〔参考文献〕

1 BBC NEWS (2018)“É preciso questionar as regras que me fizeram ser reconhecida apenas aos 71 anos, diz escritora”, BBC News Brasil, 2018/3/9. https://www.bbc.com/portuguese/brasil-43324948 閲覧日 2020/8/10

2 Cruz, Eliana Alves(2018). *O crime do Cais do Valongo*, Rio de Janeiro: Malê.

3 Dalcastagnè, R. (2011). “Entre silêncios e estereótipos:: relações raciais na literatura brasileira contemporânea”, *Estudos De Literatura Brasileira Contemporânea*, (31), pp. 87-110. Recuperado de https://periodicos.unb.br/index.php/estudos/article/view/9434 閲覧日 2020/9/27

4 Globo G1, 2020 年 8 月 27 日．https://g1.globo.com/sp/sao-paulo/noticia/2020/08/27/assassinatos-de-negros-aumentam-115percent-em-dez-anos-e-de-nao-negros-caem-129percent-no-mesmo-periodo-diz-atlas-da-violencia.ghtml 閲覧日 2020/10/19

5 Gomes, Laurentino(2019), *Escravidão: do primeiro leilão de cativos em Portugal até a morte de Zumbi dos Palmares, Volume 1*, Rio de Janeiro: Globo Livros, 2019.

6 落合雄彦編著『スピリチュアル・アフリカ』、晃洋書房、2009 年 .

〔参考サイト〕

1 “Inferno na terra: Valongo, a porta da escravidão”, in AVENTURAS NA HISTÓRIA. https://aventurasnahistoria.uol.com.br/noticias/reportagem/inferno-na-terra-valong-a-porta-da-escravidao.phtml 閲覧日 2020/10/24

2 “Memórias do Cais do Valongo”, https://aventurasnahistoria.uol.com.br/noticias/reportagem/inferno-na-terra-valong--a-porta-da-escravidao.phtml 2020/10/28